

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03017

研究課題名(和文)先駆的研究者に焦点を当てた中心地理論の伝播と受容に関する研究

研究課題名(英文)The study of diffusion and reception of central place theory, focusing on pioneers in central place research

研究代表者

杉浦 芳夫(SUGIURA, Yoshio)

首都大学東京・都市環境科学研究科・名誉教授

研究者番号：00117714

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦終戦直後のポーランドでは、Christaller(1933)に忠実に従った中心地理論の実証研究ならびに応用研究が行なわれた。いずれの研究も、中央空間計画局立案の国土計画に盛り込まれた中心地配置計画に直接、間接関係するものであった。

第二次世界大戦末期にエストニアからスウェーデンに亡命したEdgar Kantが1935年に母国で発表した中心地研究は、世界で最初に都市集落システムの研究に中心地理論を援用したものであった。そこで明らかにされた中心地勢力圏の階層構成は、アメリカ地理学界では機能地域論の実証例として評価された。

研究成果の概要(英文)：Just after the end of World War II, a substantial study and applied works of central place theory were done faithfully according to Christaller (1933). Those were directly or indirectly related with a locational planning of central places, which was incorporated into a national land planning set about by the Polish National Office of Spatial Planning.

The central place study of Edgar Kant, an Estonian refugee to Sweden, published in Estonia in 1935 was the first study in the world to apply central place theory to the study of the system of urban settlements. The hierarchical structure of Estonian central place system elucidated by Kant was evaluated in American geography as an excellent example substantiating the idea of functional region.

研究分野：人文地理学

キーワード：地理学史 中心地研究 Karol Bromek Edgar Kant Peter Woroby ポーランド エストニア カナダ

1. 研究開始当初の背景

新しい学説とはいわば学問上のイノベーションであり、とりわけ Christaller(1933)の中心地理論は戦後の世界の地理学の趨勢に大きな影響を与えた計量革命の一つの起点として位置づけられている(Johnston, 1991; Martin and James, 1993; Barnes, 2009)。学問上のイノベーションとしての中心地理論はどのような経緯で誕生し、どのような過程を経て世界の地理学界へ広がっていき、受容されたのか? 管見の限りでは世界でも誰も手がけていないこのテーマに私は関心を抱き、まずは Christaller(1933)の中心地理論について、ナチ・ドイツ時代の国土計画論としての応用的側面を、その誕生の背景とも関係づけながら研究した(杉浦:2003, 2006a, 2015)。そして中心地理論の伝播・受容に関しては、日本では中心地理論の第二次世界大戦後の受容に先立って、国土計画論者・石川栄耀の生活圏シェーマを介してすでに戦時中に「輸入」されていた事実を明らかにした(杉浦, 1996)。また、ドイツの隣国オランダへは、第二次世界大戦中におけるポルダーの集落配置計画の理論的枠組として、中心地理論が都市計画者や社会地理学者によって導入されていった経緯を明らかにした(杉浦, 2006b)。私は、さらにこうしたタイプの研究を進展させたいと考え、中心地研究分野では従来あまり関心が寄せられてこなかった国々での中心地理論の受容について解明することにした。

2. 研究の目的

私がこれまで取り組んできた世界の地理学界における中心地理論の伝播と受容に関する研究の一環として、本研究ではドイツ語影響圏下にある地理学者3名(Bromek, Kant, Woroby)に焦点を当て、当該国(ポーランド, エストニア, カナダ)での中心

地理論受容の最初期の様相について明らかにすることを目的にしている。

3. 研究の方法

次のような現地訪問調査を伴う文献考証学的研究からなっている。ポーランドの地理学者 Bromek が 1947 年に発表した、クラクフ地域を対象とする、ポーランドで最初の中心地研究論文を、ナチ・ドイツ時代に研究された同地域の中心地関連論文と比較し、計画論的研究としての特色を明らかにする。エストニアで最初に中心地研究を行なった Kant の指導学生の後背地と大市分布に関する論文(Grepp, 1933)を精読し、都市の立地に関する理論的枠組が必要とされていた可能性、ならびに Kant(1935)の中心地研究との接点を探り、Kantの中心地理論受容の背景を解明する。カナダ・レジャイナ大学の Woroby のサスカチュワン州での中心集落整備計画に関する研究報告書を精読し、中心地理論の援用内容について考察するとともに、その影響を受けて実施されてきている、その後の同地での経年的集落調査研究について詳細を明らかにする。

4. 研究成果

(1) 第二次世界大戦時にナチ・ドイツによって侵略・占領された、ポーランドを含む中・東欧諸国では、占領地域での集落再配置計画に利用された Christaller(1933)の中心地理論は、西側諸国とは違って熱狂的には受け入れられてこなかったと言われている。他方、ポーランドでは終戦直後に Bromek(1947)の世界的に見ても先駆的な中心地研究が行なわれ、集落ネットワーク整備計画に中心地理論が応用されたとも言われてきた。こうした一見矛盾するかのような、ポーランドと中心地理論との関係をめぐる言説・事実について、主としてポ

ーランド側の文献に基づいて考察した結果、以下のようなことが明らかになった。

Bromek (1947) は、Christaller (1933) にならい、9 階層からなるポーランド全域の中心地システムを措定した。また、1947 年に中央空間計画局によって立案された国土計画の中でも、二つの中心地配置案がそれぞれ Dzięwoński と Kostrowicki が中心になってとりまとめられた。このうち Dzięwoński 案では、Bromek (1947a) と同様、Christaller (1933) にならって 9 階層からなるポーランド全域の中心地システムが措定されている。Kostrowicki 案も、各階層中心地の理論的影響圏の半径を Christaller (1933) の補完地域の半径に一致させることで、Christaller (1933) の階層構成に合致させようとしている。しかし、これらの研究・計画案は Christaller (1933) に忠実な余り、無理な階層設定を行っており、当時のポーランドの状況を踏まえると、ポーランド全域の中心地システムは 7 階層ないしは 8 階層から成り立っていると考えるのが適切と判断された。中心地の階層構成を Christaller (1933) と比較すると、上位階層下位～中位階層中位の階層は Christaller (1933) の L・P・G 段階（前者二つはプロイセンの州庁所在都市・県庁所在都市相当）の階層と対応しているが、中位階層以下の階層は Christaller (1933) のものとは一対一に対応していなかった。この不一致は、より人口密度・需要密度が希薄なポーランドの状況を踏まえ、ドイツでは下位中心地で立地が始まる中心機能の一部が、中位階層までのより上位の階層になって初めて立地するといった傾向を階層区分に反映させたことに起因している。

このように計画論としていったんは注目を浴びた中心地理論であったが、国土計画案完成後間もなくして、その評価は一変す

る。1940 年代末、ポーランド統一労働者党（＝共産党）による事実上の一党独裁政権が樹立され、ソ連型の計画経済体制が導入されることにより中央空間計画局が廃止されたことが、その背景にあった。中央空間計画局の廃止に伴って、経済的裏づけを欠く国土計画案は夢物語にすぎないと批判され、計画が実施に移されることはなかった。そして、国土計画案の中に盛り込まれていた中心地配置案に理論的基礎を与えた中心地理論に対しても、マルクス経済学者から、生産関係を無視した形式主義的な理論であるとの批判がなされたのである。その結果、計画論としての中心地理論の導入に積極的であった Dzięwoński と Kostrowicki も、自らの試みの評価を変えざるをえなくなってしまった。

(2) スウェーデン・ルンド学派の成立に貢献した Edgar Kant の地理学については、これまでに Buttner (1987, 1994, 2000) や Kurs (1992) によって、その概容が明らかにされている。それに対して本研究では、必ずしも詳しくは論じられてこなかった Kant (1935) の中心地研究について、その特徴、影響、応用に焦点を当てて考察した。その結果、以下のようなことが明らかになった。

Kant (1935) においては、中心地の階層区分は非農業人口に相当する第二次・三次産業職業人口に基づいて 5 階層に区分された。戦前エストニアの中心地の分布は、巨視的に見ると高地と低地といった地形条件を反映した農業生産性と強く関係した人口密度と対応し、タリンとタルトゥを頂点とする両市の勢力圏が国内を二分していた。両者の勢力圏外にあるナルヴァとクレッサレが独立した中心地サブシステムを形成していることは、ロシア帝国時代の行政領

域の枠組が独立後までも影響したことを示すものである。

Kant (1935) の中心地研究は、中位・上位中心地の周りには主として下位中心地が環状に分布し、上位中心地の周りには、下位中心地の環状分布の外側に、主として中位中心地が環状に分布するといった圏構造に基づく中心地分布把握法によって特徴づけられた。Christaller (1933) を参考にしたと思われるこの方法により、エストニアの中心地分布には上記のようにあらかじめ想定した同心円構造がある程度まで見られることが明らかになった。

やがて Kant (1935) の中心地研究は、そのエッセンスをまとめた Kant (1951) を経由して、アメリカ地理学者の間では勢力圏の階層性を実証するものとして受け取られた。なかでも Taaffe は、Kant の中心地研究をアメリカ地理学における機能地域論の嚆矢である Platt (1928) の延長上にあるものとして理解した。さらには、Kant の中心地研究の事実上の継承者ともいえる Godlund が提案した中心地勢力圏画定モデル (Godlund 1956) は、アメリカにおける計量地理学の展開に少なからず影響を与えた。

Kant はまた地理学の実践的応用の面でも先駆的であった。母国エストニアでは、Kant (1935) を踏まえて、行政領域改革問題について提言し、実際に弟子の Krepp は 1930 年代後半に実施された自治体領域再編計画に参画し、中心地理論を念頭に置きながら再編案策定に取り組んだ。さらに、Kant の亡命先のスウェーデンでは、ルンド大学での教え子の Hägerstrand と Godlund が政府の自治体改革専門委員会委員に任命され、彼らが提案した中心地理論を踏まえた自治体改革案策定の基本方針は、1964 年政府承認の自治体再編案に実際に反映された。Kant のあり得たかもしれない地理学の

実践としては、エストニアがナチ・ドイツに占領されていた時代、ドイツ人地理学者 Boustedt が Kant (1935) を参考にして取り組んだと思われるエストニアの中心地研究 (Boustedt 1943) との関係がある。この研究は東方占領地研究の一環として行なわれた可能性があり、もしも時代がナチ・ドイツに味方していたとしたら、エストニアの都市集落研究の専門家であった Kant は、ナチ・ドイツによる本格的な集落再配置計画に動員されたかもしれないのである。

(3) 中心地研究はもっぱら自由主義諸国を中心に行なわれてきたので、ポーランドにおける中心地研究に関する本格的な研究は、内外を通して本研究が最初のものである。また Edgar Kant の中心地研究に関しても、本研究は従来の研究に対して、Kant の中心地研究の特徴 (= 圏構造に基づく中心地分布把握法)、エストニアの自治体再編計画への取り組みの実態、ナチ・ドイツ占領下エストニアでの集落再配置計画との関わりなどについて新たな知見をもたらした。なお、当初予定していながら着手できなかったカナダにおける中心地理論の受容に関する研究は、2018 年度から新たに始まる課題「中心地理論の計画論的応用の展開に関する研究」で改めて取り組み続報として発表する。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

杉浦芳夫 (2018): Edgar Kant の中心地研究とその現代地理学史上での意義。都市地理学, 13, 1-36. 査読有

杉浦芳夫 (2017): 渡辺良雄先生没後 30 年追悼記念特集号 はしがき 渡辺良雄先生と中心地研究についての覚え書き。理論地理学ノート, 19, 47-54. 査読無

杉浦芳夫 (2017): Pokshishevsky の中心地理理論批評についての補遺．理論地理学ノート, **19**, 105-118．査読無

杉浦芳夫 (2017): 第二次世界大戦後のポーランドにおける幻の国土計画と中心地理理論．都市地理学, **12**, 1-32．査読有

杉浦芳夫 (2016): ソ連の中心地研究素描 Pokshishevskiy による中心地理理論批評を手がかりにして．理論地理学ノート, **18**, 27-38．査読無

6．研究組織

(1)研究代表者

杉浦 芳夫 (SUGIURA, Yoshio)

首都大学東京・都市環境科学研究科・名誉教授

研究者番号：00117714